



地域に密着し、
さまざまな視点から地域を見つめ続けてきた
記者の声を聞く—。

情報紙の役割—

大好きなまちの「今」を伝えたい。
まちの今を記録し、人々の記憶に残る情報紙。
情報を伝えるだけでいいの。情報紙の付加価値とは何か。
求められる情報紙の姿とは—。

いつもは取材する側の自分が、
広報紙に載るのは不思議な感覚で
すが…。廿日市市の印象は、自治
活動が活発だということですね。
一般的にベッドタウンでは、地域
のつながりが薄くなりがちですが、
コミュニティの母体がしっかりし
ているからだと思えます。

「広報はつかいち」について、い
つもその取材力に驚かされていま
す。ひと月に何人も取材され、し
かも人の心の深いところまで引き
出しています。ときには表紙にイン
パクトのあるイメージ写真を使
い、読者の目を引く努力を惜しま
ない。今のスタイルを続けてほし
いと思えます。

週刊で発行している西広島タイ
ムスは、無料で配布まで行って
います。心掛けているのは「地域の
回覧板」だということ。一般紙が
取り扱わないような小さな出来事
でも取り上げています。地域の運
動会や、清掃活動など、近所の人
や身近な知り合いが掲載されるこ
とでその役割を担っています。

言葉を扱う商売なので、間違え
ないこと、正確に書くことはもち
ろんです。が、「伝わる言葉」に気を
付けています。言葉は、書き方一
つで違った意味になってしまうこ
ともあるからです。例えば、「多
い」という表現と「少なくない」
という表現では、大きくニュアン

スが変わり、違った意味にとられ
たりします。

写真も大事な要素の一つ。記事
の中で写真の持つ力は大きいです。
「百聞は一見にしかず」という言葉
があるように、100行書いた文章
でも1枚の写真にかなわないこと
もあります。だから、写真には気を
使い、取材対象者の生きた表情を
撮るようにしています。

最後に、わたし自身、紙の持つ
チカラは大きいと信じています。
何もなければただの紙ですが、
そこに記者が魂を込めることで、
温もりのある紙面を作ることが
できます。

電池も不要で、いつでもどこ
でも好きなところで読めること。
また、手触りや、次のページをめ
くる楽しさ、インクの匂いなど、
五感を使って楽しめるところにも
魅力があると思っています。

まちの「今」を紙面に掲載する
ことで、地域の人に喜んでいただ
ける。そして、そのことでます
地域が輝いていく。そんなお手
伝いができたらと思っています。

生活者の視点を忘れないこと。 「かわらばん」であることに 変わりはありません—。

廿日市市は、「広い」というのが
第一印象ですね。瀬戸内海の宮島
から西中国山地の吉和まで、四季
折々の行事もあり、取材には事欠
きません。その中でも、特に根付
いている文化や伝統を大切に守っ
てきたということを強く感じます。

そして、「広報はつかいち」の印
象は、「シンプル」です。実はこれ
が難しいこと。効果的な写真を大
きく使ったり、余白を多く使った
りと、レイアウトを工夫され、「読
みやすさ」を追求されています。

伝える中身もちろんですが、
「読みやすさ」は市民目線を考える
上で大切なことだと思います。

わたしが記事を書く上で大事に
していることは、さまざまな立場
の人の話をしっかり聞くこと。一
例ですが、イベントの取材では、
主催する側だけでなく参加者の声
も聞きます。それぞれの立場で感
じ方や考え方が違うからです。

「この記事は地域の暮らしにどん
な影響があるのだろうか」「生活の
どんな面で良くなり、または困るの
だろうか」。そういった生活者の視
点を忘

中国新聞社 西広島支局長
くわばら・まさとし
桑原 正敏さん

昭和50年、広島市西区生まれ。横浜市立
大学卒。平成10年、中国新聞社入社。報
道部、呉支社、整理部などを経て、平成
24年から西広島支局長。



Kuwabara Masatoshi

れないよう心掛けています。

また、中学生やお年寄りにも分
かりやすく伝えることも大事なこ
と。とかく行政の施策を伝えると
きは専門用語を並べがちになるた
め、かみ砕いた説明が必要になり
ます。そのための材料集めも取材
の一つです。

情報技術が発達した現在でも、
「かわらばん」であることに変わ
りはないと思っています。新聞は、
毎日の暮らしの中で起きた出来事
を素早く伝えることが使命です。
昨日の出来事が、今日の朝刊に
載っている。だからこそ、意味が
あるのです。

そして、地域に暮らす人々の関

心に込めていくこと。今の地域の
関心ごととは何か、それをいち早く
キャッチし、ニーズに応じた情報
を提供するのも大きな使命です。
そのため、記者に求められるのは
アンテナを高くすることと、足で
探す根気です。

「新聞は最新の歴史書」とも言わ
れ、まちの姿を後世に残す役割も
あると思っています。しかし、そ
れは「速報性」と、「ニーズ」に
応え、地域の営みを記し続けた積
み重ねの結果なのです。

今後も、地域で汗をかいている
人をたくさん取り上げ、地域が盛
り上がるようなお役に立てたら
と思っています。

地域の人に喜んでいただき、 地域が輝いていく。 そんなお手伝いができたら—



㈱エル・コ
西広島タイムス事業部 編集グループ
おおさき・ひでゆき
大崎 英之さん

昭和49年、広島市西区生まれ。明治大学
卒。平成13年、当時の㈱エル・ココー
ポレーションに入社。宮島、大野地域などを
担当し、現在廿日市地域担当。

「スポーツなどの結果も、できるだけ名前を掲載し、紙面を見
た人が『次は載りたい』と頑張ってもらえるような紙面づくりを
心掛けています」と大崎さん。一度取材した人からの情報も多
く、「信頼あつての仕事。やりがい大きいです」と話す。写真1
2月に行われた「中学校女子はつかいち駅伝大会」で
優勝した大野東中学校の選手たち。集合写真を掲載するのも、
たくさん表情を届けたいから。写真2「湯崎県知事の地域の宝
チャレンジ・トーク」では、発表者から大崎記者の名前
も出された。地域に密着した取材のたまものだ。



1



2



1



2

情報技術が発達し、さまざまなツールで情報を手に入れるこ
とができる現在。「時代は変わっても、受け手がいる限り、そ
の時代に求められる情報を発信していきます」と桑原さん。
丁寧で細やかな取材が続いている。「大きな声にならない『声
なき声』を拾うのも、わたしたちの使命です」と話す。写真1
1月に行われた「吉和大とんどまつり」。大切に守られて
いる地域の行事を約5時間かけて取材。写真2宮内小学校
で行われた「選挙出前講座」。時間の許す限り聞き取り取材を
続ける桑原さんの姿があった。